



十王讚歎修善鈔圖繪

上

ハ 5
3747
1



115
3747
1

嘉永癸丑歲春校再雕

天台沙門隆堯法印述

十王讚歎
修善鈔圖繪

平安書肆

文昌堂
萬玉堂
文德堂

合梓

十王讚嘆修善鈔序

夫十王おん申まうす御事ごんご々か忝かたじけちと本ほん
地ぢ是これ皆みな久く成ちやう如に來ん淡たん位ゐ菩ぼ薩さつのの身み
坐ざとと雖いへ然ども流りゅう轉てん生じやう死じ凡ふん夫ふとと慈あはれてと慙とん
柔あう和わ忍にん辱じゆく法はふ形けいとと隱いん假げ極ごく惡あく忿ふん怒どをを
姿すがたとと顯あ衆しゆ生じやう眞しん途と趣すゑ々々時とき中ちゆう有あ迷ま闇あん
の道みち坐ま々々初はつ七しち々々日にち々々百ひやく箇こ日にち一いつ周しゆう

十王讚嘆修善鈔圖繪序

忌終第三年きまつしんまで次第あがらふ是これと請取うけとて
其罪業そのざいごうを輕重きやうじゆうと勘かんて未來みらいの生所しやうじよに
定給さだめたまふ此これと十王じゆうおうと名奉なをたまる凡諸佛菩薩おんそふしつがさつ
の利益區りやくくちて互たがひに勝劣まうりやくなり雖此いふやうの
巧方便けうほうべん殊ことふ以至妙いまでうなり者ものとや其
故ゆゑも如此ごとく糺明御きうめいごよりたれのひ誰人たれ
の罪業ざいごうと恐おそむるや若罪業しやくごうは恐おそむ

んあふ豈しやう生死しやうじ解脱げたつの道みち有あるや然しかんん今稱名いましやうめい
の隙ひまと以聊彼等いしてられ本地垂迹ほんぢしゆじ利生方りしやうほう
便べん乃趣ふゆと鹿々注ろくろくしゆと者ものなり此これと十王本じゆうおうほん
迹讚嘆鈔しやくさんたんしやうと名なて座ざの右みぎに置あけて永廢惡ちやうくそいあく
修善法しゆぜんぽう警策けいさくやせん而已のみ

于時永享五癸しゆじやうご丑年十月三日於金勝寺谷艸庵書之

天台沙門法印隆堯六十五歳





十王讚歎修善鈔圖繪

目錄

上之卷

第一 十王經の來由事

附 釋尊十王經を説く事

第二 孝養父母佛説事

附 佛涅槃の時摩耶夫人天降る事

第三 廿四孝乃中郭巨事

附 同く金の釜を堀出き鉢

第四 初七日秦廣王の事

附 中有比姿并死出乃山の体

秦廣王の廳に到る鉢

第五 二七日初江王の事

附 初江王に所ふ到る鉢

中之卷

第一 三七日宗帝王乃事

附 三途河をりける鉢

第二 四七日五官王の事

附 五官王に場よける體

第三 五七日閻魔大王の處に到る体

附 亡者王の前ふ責らる有様

第四 六七日變成王の事

附 亡者此王所にける體

第五 廿四孝の中董永の事

附 天女天降て董永が妻とある体

下之卷

第一 七七日泰山王の事

附 亡者あつての体

第二 百箇日平等王の事

附 亡者此王の所に到る体

第三 一周忌都市王の事

附 亡者一周忌此比の有様

第四 三回忌五道轉輪王の事

附 亡者此王の所の体

無間大地獄の畧體

第五 見聞集極樂此事

附 聖衆來迎の体

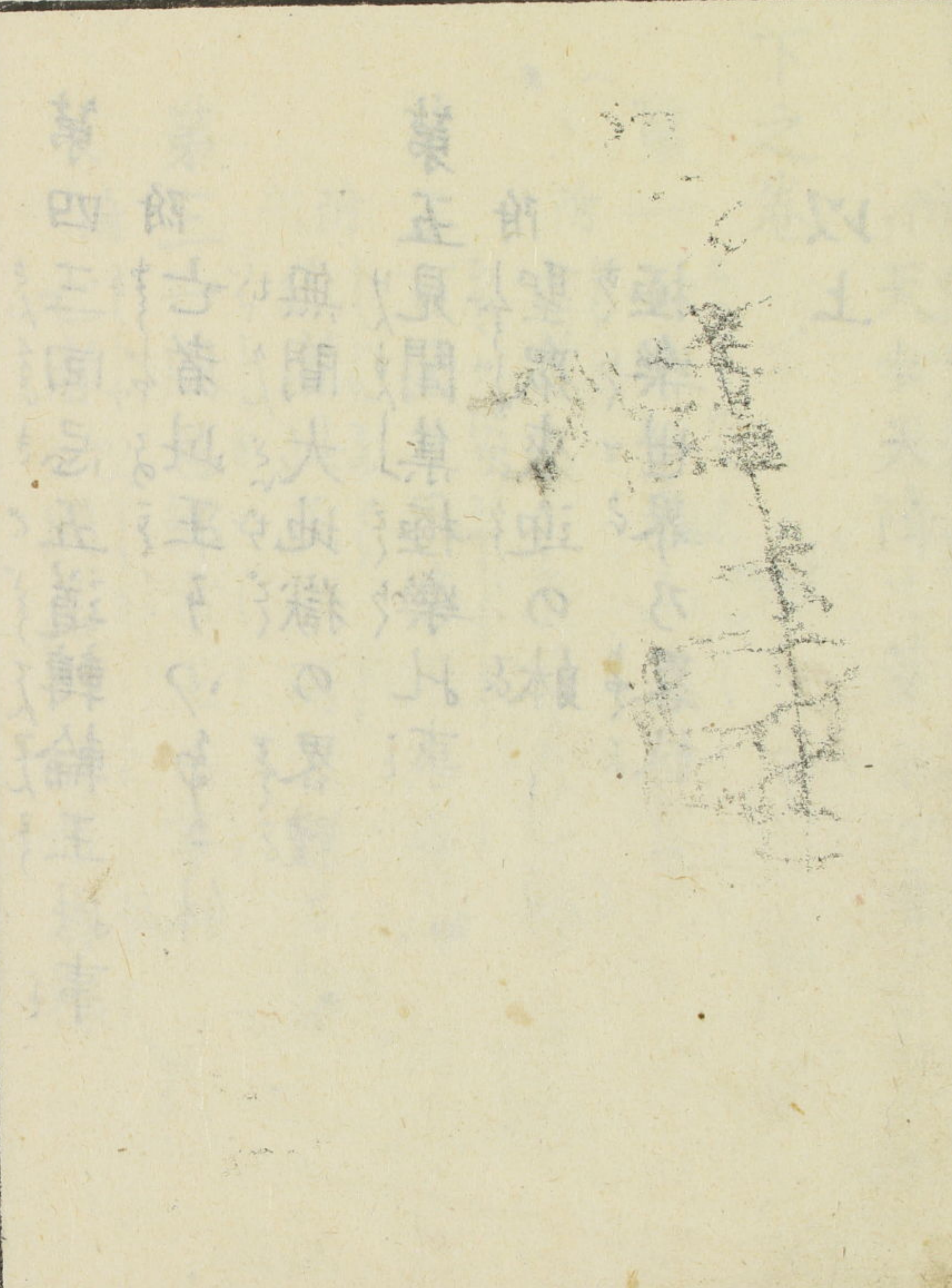
極樂世界乃畧體

以上

十王本迹讚嘆修善抄圖繪卷之上

沙門 隆堯為勸化錄之

抑十王經と申ハ具ハ佛説地藏菩薩發心因緣十王經と申と即ラ唐土成都府大聖慈恩寺沙門藏川法師弘通の經ナリ此經ハ釋迦如来既ハ涅槃ノ入人ト給フ時大光明ト放闍魔王宮ト照シ給ハ諸王獄司候官司命神司録神闍魔王の使者の羅刹波安等の無量無邊



の異類異形の鬼神と引連て大地の底より忽
然として涌出佛と恭敬供養し合掌して礼し
奉ら如來閻魔王小告給り此娑婆國土一切衆
生鈍根无智めて父母よ孝せば因果と信せば
あま己が心と師として心の儘よ五逆十惡等の
大罪を作し皆悉く地獄小墮在と我世尊に非
んば誰か大悲と起して此を度せんや我今略し
て此と説くと爾時閻魔王及諸王等坐より起

て合掌し佛に向て白言善哉々々釋迦牟尼法
王よく平等の大悲を以て我等が爲ふ此を説給
もく三途の暗を照し給へと此時佛閻魔王等
の請小應じて説給りが此十王經なり然則
佛既涅槃に入んと給ふ時末世衆生よ三世
因果の道理分明なるを以て示し佛菩薩の大
悲善巧を知りめく三途を苦患と濟んと思食
る大悲深重の御遺言をんて深此を仰へ

專ら信ずるものとや于時今世尊闍魔
王等に告給ふ此娑婆界ハ衆生鈍根障重小
者因果と信ぜども父母に不孝して唯己が
心と師をして心め思ふ儘ハ大罪を作て自ら好
て地獄に入る佛深く此を哀れ給へども自ら作せ
る業を故に佛力と雖云何とも給ふこと能は
是以たし佛道を行すも縁あり衆生ハ責
てハ人間天上の因とふる孝養父母等の世善と勸

て三惡道の苦患を免れせんとの大悲の御深切
かる故に先第一は父母の恩と知せし孝養の
心有ば是人倫の道人天業因ぞと教給ふ
佛菩薩の恩徳ハ出世證道の恩りて其大なる
まは父母の恩に過たること廣大けれども愚鈍の
衆生ハ此を知れど能く父母に恩の如きハ現在の
恩たるを誰れと知ると云んや然れども澆
季濁惡の衆生ハ愚痴暗迷の盲人の日

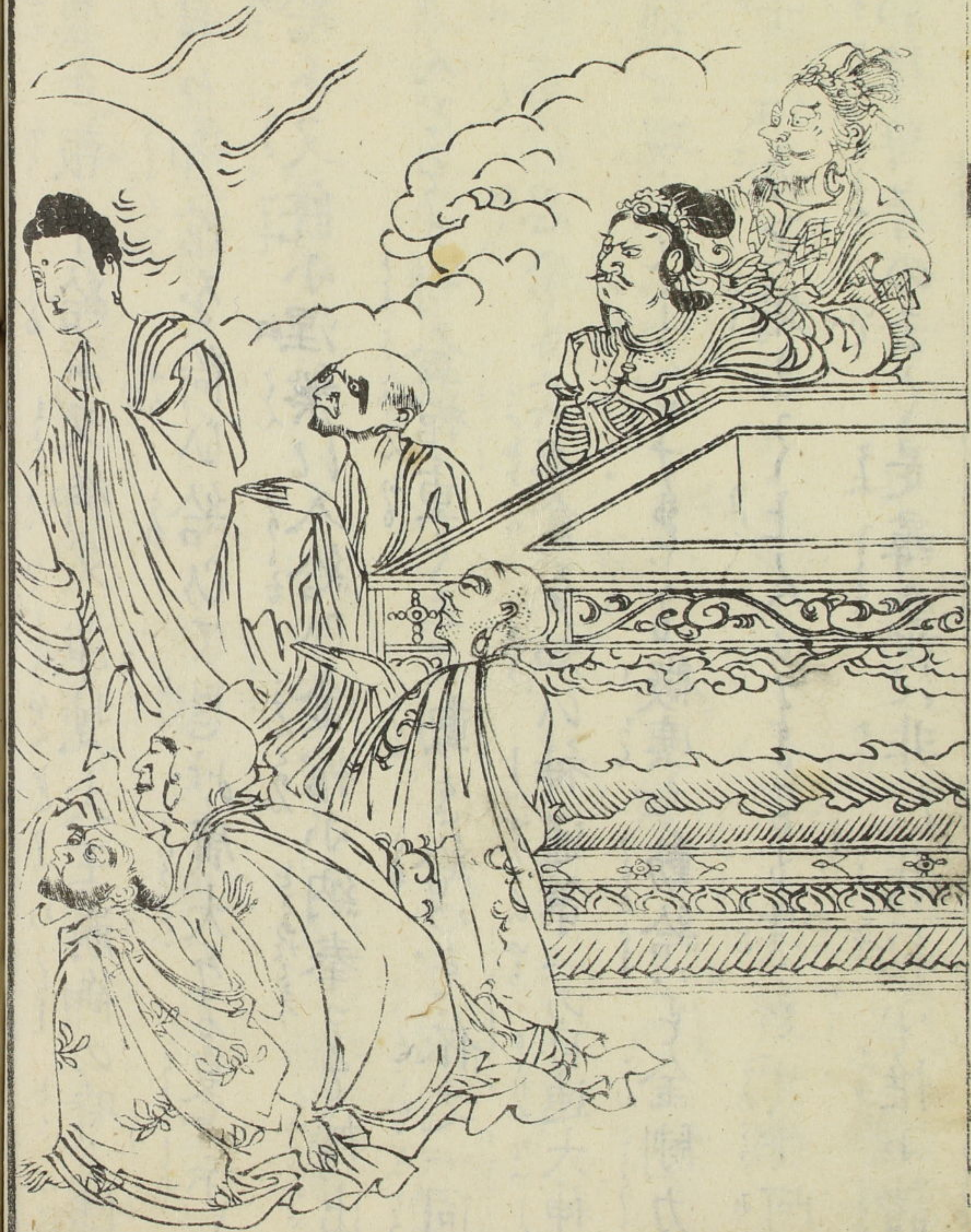
月とていさくたう如今天下太平の恩澤よ沼ひ儒佛
神三道の教明かるといへども曾て其教を聞て
行んと思ふ心もちく己が心と師よりて心よ思ふ
儘よ悪を働く父母の恩と忘めて不孝といひ
不孝は心より種々の悪を行ひを爲と故よ三道
とて恩を知と以て道の根元よ是は佛世尊ハ
御母摩耶夫人の爲よ忉利天よ昇つて給ひて一
夏九十日の間報恩經を説給ひて胎内十月也

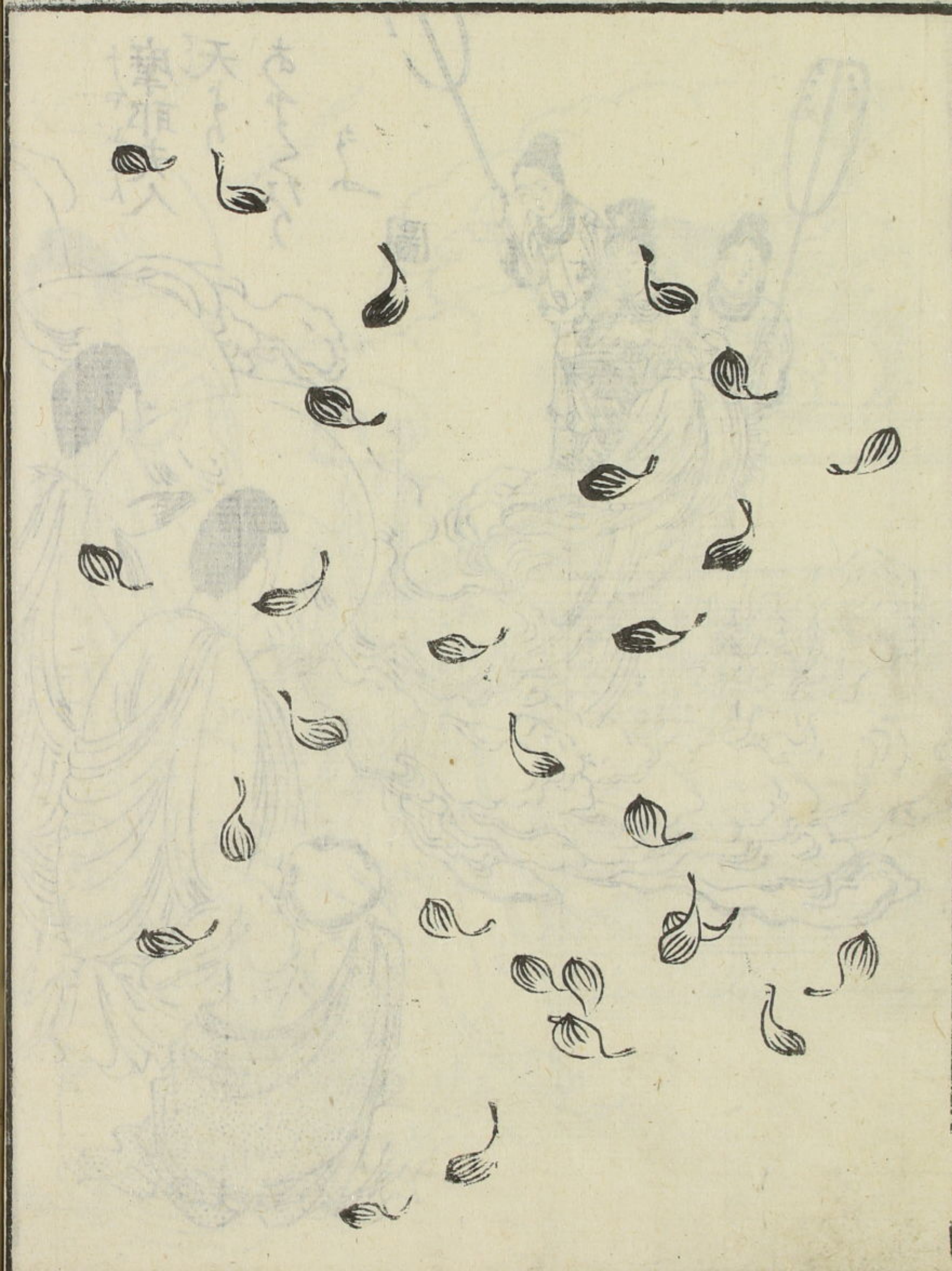
恩を報し給ふ又御父淨梵大王崩御の時ハ佛
自ら御棺を荷ひ給ひて恩け廣大なる夏と示し
給ふ又既小涅槃に入給ひ金棺小納奉つて擔出
さんとする時金棺重く志て動さ給つて依之一同
不審に思へども其思食を知り神通第一の目連大神
通を現して上んとすれども微塵も動給つて金剛力
士一王力と竭ち上んとすれども叶はざり其時阿
那律尊者の云く是尋常に非び我私小惟ふ諸



摩耶夫人
天より
あやふたり
まよ

圖





天悉く來下し給へども御母摩耶聖后未と來
 下在さび恐くハ此と待給ふかうんと其儘神通
 と現して忉利天よ昇り佛涅槃の趣を生告給ひ
 う、大に驚給ひく直小天降給へハ釋迦如來金
 棺と蹴破て立出給ふよ本佛に替らぬ化佛左
 右よ現れ給ひ三體均く大光明を放て御母摩耶
 夫人と九拜在り阿難に告給はく我未來世の不孝
 の衆生に父母は恩の廣大なる事と知せし孝養と

かくも又惡趣の苦患と濟んが爲よ貴母の來下と
 待て如此禮拜一奉るの給へり佛如是慇懃よ
 孝養と勸め給ふ一代八万四千の教を綱と張て
 萬機と濟度し給ふ佛法此機縁未熟の者小
 い先孝養父母等の世間乃善法より教て地獄の
 苦を免るの終よ萬徳圓滿の名號と迴向し
 給ふの善巧ちが故小觀經よ孝養父母奉事師
 長等を三福の世善と説て三世諸佛淨業の正因

也との給ふ然則過去の諸佛も現在の釋迦も當
 來の彌勒佛等も佛法に入の初門に孝養父母と本
 り給ふ事明かり亦儒道に在て孝は百行之本
 也と教て親の恩と知人仕君不忠不孝先陣
 無勇不孝居處不嚴不孝交朋友無信不孝か
 ど云て孝心ある人已が身小辱を受て父母の
 名と汚し父母は徳を無とする事と恐る故に居
 處嚴ちし孝に不と第一小往く處遊ふ

處と簡ひ博奕諸勝負宜華口論等の場より上寄
惡き友と交らざるは自わく父母の心と安らぐ
め已が身も過ちなく人の爲小辱えらるるを
何某の子息は天晴能道と守り正敷者也と稱
らるる孝經の所謂立身行道舉名後世以顯父
母孝之終也と云へる聖人の教ふ契ふの
沈季詮と云人の少ありて父と亡い母に孝あり
常に人と争む人の云く季詮は人より畏るる柔弱

の者ありと季詮が云く吾豈人に恐んや人の子
たり者ハ憂を親小貼とべけんや故に人小争むと
云へる季詮全弱ハ非ど智仁勇兼備の英雄
あり只己が身に過ありハ母此心を傷む事と
恐る故也季詮が傳に出總して惡きもの起る根本ハ父母
の恩を知らざり起る此故に孝ハ百行の本と云
る吾國神道の御教も恩と知と本と給ふ
既よ葛城一言主命の宣く諸人よ天よ祈る地よ

願ひく諸神に祈んより汝が父母に能事へ二一
 親ハ内外の神明をば内あつらふて外つ
 と祈るべしと託宣し給へといふ神國を
 とて父母情なく産の儘ふて野山に捨たるとん何の神
 此を育て長給ふ例やぶうす父母慈愛の養育よ
 非あつ何ぞ長事と多人是故よ詩經蓼莪の篇よ無
 父何怙無母何恃出則銜恤入則靡至父兮生我母
 鞠我拊我畜我長我育我顧我復我欲報之德昊

天岡極と云り然と其父母の恩と報りんと思ふ心と
 常に親よ戻い晝夜に親の心を痛みの動を
 親の負よ泥と塗て耻辱と先祖よまで及と様
 身持の何よ拍掌打て神よ幸と祈りも幕の先よ
 不浄とゆりて坐敷と掃よ均し何程天地の神よ祈る
 とも神罰を蒙るべしと納受在と神も一神もあ
 らざる御誠かり是故小神道ハ解除と云旋あり
 扱と云ハ此を讀以を行ふて惡事災難病氣等を拂

ふ事の様、心得たる道と學ぶ、愚者誤る、既、
 勢觀上人の廣義瑞決集、中臣菟を釋すとて假
 令解除、非とも解除をり、已、過を改め、心身清淨
 せし、神捨給へ、天災と遁んとして解除の儀
 式を用とも、心よ非を知て過と改る心なく、幾度解
 除とも、天災は免る、すと云ひ、又、喻、汚穢不
 淨の惡心、水比如く、神明、火の如く、火と火と、合
 火と水と、敵と能々、味とべと云ひ、是等の説と正

學めて、神道の正意と辨へ、解除の義よ、通達の
 教り、誠、聖賢君子と雖、過を犯ること能は、苟
 も、心身と省て、過ある時、速に改むを、解除の
 本意とも、然、今、時、愚痴、文盲の、神主等、神前
 て、菟と讀誤の甚し、也、神前、て、誦了、の、祝詞、
 申りの也、其、證、ハ、大納言、行成、郷の、權記、ハ、行向
 社頭、末讀、太宣言、前、先使、中臣、讀菟、詞、自行、菟
 式、とい、弘法、大師の、天地、麗氣、記、乃、中

不神拜内解除と云ふ又菅原是善卿ハ天満宮
の御父なり此是善卿の書給へる東宮切額小ハ
解除除罪之法贖銅免罪之式とあり料らる人ハ
解除と行ハセテ贖銅今の過料を以て罪と贖ふる法
曹至要抄に見へたり如此解除ハ罪を除法ハり
未神前ハ向ハる前此と行ふて心身清淨ハり
めて神前ハ向ふハ神代ハ來ハの法則ハなり此義ハ
日本紀古事紀律令等ハの古書ハを引テ證セル牧

擧ルすルといハとハあラずハ既ニハ加茂社ハの祭礼
の式ハ勅使神門ハの外ハ假屋ハ入給ヒて解
除式ハ行ヒ其後ハ神門ハ入給フと知ルべシ
然レハ神道ハの本意ハと別ニ々ハ非ズ唯ニ己ハ不孝
不忠不義不實ハの誤ト改メて向後ハを嗜慎ト恩
と知ル報シ之ハ心ハあリと以テ昔ハハ冀シくハ神國ハの民
事ハ人ハ此理ハを明ク已カ心中ハと省テ人倫ハの道
小違ハ誤リハ速ニ此ト改メ神慮ハと恐れ慎

〇心は誠の道小叶が祈らばも神や守ら
 んとの神歌も叶べしものや苟くも我過を知ハ
 三道の奥義なり是故に孔子は道を行と射と喩ら
 れり夫射者ハ己が體と正して左右小心と竭
 放て當る獲るも向の的は不足ハ云ど此ハ己が
 藝の未熟ゆへ當るしと彌々己が方を省て
 露計を其的と憾ずして只己求るものと云へり
 人道を行ふも亦如此有べく君以仁爲的臣以忠

爲的父以慈爲的子以孝爲的夫婦兄弟朋友皆
 夫々に行べき道の的ありて假しも向の的を恨ず
 臣不忠を時不忠の臣と恨と我君たるの仁を
 故ありと省て弥々仁を旨と君不明ゆへ
 恩賞を其時ハ目の明ぬ主人なりと憾と己が
 忠義の信を其ありと省て増々忠を勵と不孝の
 子と恨す己が教の不足を省まると己が少時の不
 孝と思ひ子としてハ親に事て親の心よ叶はんと

必^{かならず}親^{おや}と恨^{にくしみ}ど已^{あきら}む孝^{うやまつ}心の信^{まこと}を以^{もつ}て省^{しやう}夫婦^{ふとふ}
兄弟^{けいだい}朋友^{ゆうゆう}も其^{その}意^いを以^{もつ}て已^{あきら}むが手^てえと嗜^{たがひ}慎^{しん}で
弥^{ますます}々^{ますます}善^{ぜん}道^{だう}よ進^{すす}み堯^{ぎやう}舜^{しゆん}の君^{きみ}と云^いふも
耻^{はぢ}らまはしと教^{しよ}らまはし又^{また}竜^{りゆう}田^{てん}明^{めい}神^{しん}の言^{こと}く諸^{しよ}
人^{ひと}よ心^{こころ}は鏡^{かみ}塵^{ちん}はれど神^{しん}明^{めい}姿^{すがた}の影^{かげ}と病^{やま}み祈^{いの}
心の強^{つよ}らん程^{ほど}小^{せう}人^{ひと}の心^{こころ}を誠^{まこと}に道^{みち}と磨^こみ祈^{いの}らまはし
と心^{こころ}の儘^{まま}を託^{たく}宣^{せん}給^{たま}へり此^{この}意^いは祈^{いの}人^{ひと}の心^{こころ}
と鏡^{かみ}小^{せう}移^{うつ}ら影^{かげ}に喻^{たと}給^{たま}へりふや曇^{くもり}たる鏡^{かみ}に向^{むか}へり

心^{こころ}と勵^{たげ}まはし影^{かげ}と移^{うつ}らん心^{こころ}と影^{かげ}と見^みる
まは叶^{かな}まはし其^{その}心^{こころ}配^{はい}とせん心^{こころ}鏡^{かみ}なま磨^こまは
假^{かり}令^{しよ}影^{かげ}も移^{うつ}ら思^{おも}ふも不^ふ口^{くち}下^げも影^{かげ}
ハ移^{うつ}べし例^{れい}も云^いふ家^け頼^{らい}有^あり何^{なに}卒^{そつ}主人^{しゆじん}の
機^きに入^いんと日^ひ參^{さん}や千^{せん}度^た詰^じめて祈^{いの}らまはし只^{ただ}
出^い世^せの望^{のぞ}み己^{おのれ}が身^み欲^{よく}計^{けい}の忠^{ちゆう}義^ぎの信^{まこと}
かれぬのいへ出^い世^せれは假^{かり}令^{しよ}佛^{ぶつ}神^{しん}よ
祈^{いの}らまはし心^{こころ}の配^{はい}と主人^{しゆじん}の事^{こと}に心^{こころ}とつる

晝夜と云ど働て己が出世の欲と離て主人を
 爲よ欲と働りむ自ら人倫れ道よ叶佛神の御心
 小も叶て佛天の恵よ預て主家の心も叶ひて
 出世とくも支疑らんが如く龍田の御託宣此
 理と教給ふ實よ有難と神教かづや看よく
 神儒佛三道且く異ちりといふも其旨一致は飯
 と然ども其源は佛の大悲より起る是故は此經
 小も先一番小恩と知らる支と悲し給ふ心地

觀經よハ慈父恩高如山王悲母恩深如大海と
 説給ふその廣大なる父母の恩と知れ程の者ハ
 己が心と師とと有て論の中よハ勿師汝心可
 爲汝心之師との給ひく己が心と師とととと
 己が心よ思ふ儘と定規として心の儘は振舞と
 云ふ心の師とちるとい己が心に思處と能勘弁
 て惡と捨善と行と心れ師とちるとの給へるあり
 如此慇懃丁重の教と垂給へると聊も用どて

爲師己心思ふ儘ふ惡を作て我心も耻ぢ勿論
他人も耻ぢ心のつれを放逸无慙の惡人と云
如此極重の惡人の自業自得れ道理は牽れ
必地獄ふ墮らあとい喻は公儀の法度と犯せ
者の刑罰ふ値が如し罪人有り成敗せんと牽
屋捕人と抱て待給ふよ非ぞ天下に罪人無り
らめんが爲の懲り上り御仁政あり然
れ人を入る爲の牽は非ぞ人を入まとの牽屋

けり獄門火罪磔等の刑罰事ハ如斯罪科とさ
せしと一殺多生の仁政を法令たるが如し
今佛の悲く給ふ墮獄の人も亦此は同一
罪人の爲は構たる地獄ふ非ぞ造所の罪より
顯れら地獄かり去る大名の家老去る和
尚と困とと問は地獄ふ大なる金
有て其中は銅の熱湯と涌して罪人を責ると
云があの地獄の釜は何れ時代は何と云人の好

して何と云鑄物師の鑄と金で御坐ると其時
 和尚云く其義ハ追て御答申とべし其よ就て
 先其許へ御尋申さんあの唐土の二十四孝と
 申ハ實てあざうら偽てごごうと家老の云く何
 のあれが偽て有ふ眞實孝行人なればこそて
 孝子傳ふ載て四百餘州の孝子の鑑とせり
 日本もて孝道の規矩とせり和尚云く然ハ
 最一問べしあの廿四孝の中此郭巨が掘出と



郭巨金の金を
ほり出せり

金の釜ハ何の時代ハ何と云人の誂とて何と申
 鑄物師の鑄たる釜も候や此御返答次第ふ
 て地獄の釜も作者も委御答申すべと云とけ
 るハ家老大ハ感伏一何様郭巨の得たる釜ハ
 孝感天心と動と全作人の有ハ非ハ夫婦が
 孝心の實と感ト天より與ふる賜也と和尚の
 云く地獄の釜ハ作者と例して知給へ全作人
 の有ハ非と罪人已々が作ら業報の所感あり

善惡異なりといへど因果業報毫厘も違ふ
 ありと申しつゝ家老中心以て深く三世因果
 の道理と信じて後世を願ひて人傳聞る
 是以可知王法の科人も不便と思召とも自
 業自得の放之政道不立依之刑罰之て
 萬人の惡と懲善道よ進ませ給ふ佛亦如是智
 慧慈悲方便の三徳と具足し給へも諸惡莫作
 の法度と背きて自作ら業せしむ放之諸佛の

法令と破ら是故は青蓮の御瞬より血の泪と流
 させ給ひ此と悲く給ひ種々善巧方便して此を
 濟んて給ふ依之今此十王經及び地藏十輪經
 等の説の如し十王十體ハ悉皆佛菩薩の化現
 とく殊よ其主領たる閻魔王ハ六道能化の地
 藏菩薩なり此等の佛菩薩何故は五道の冥官
 と成て或ハ淨頗梨の鏡を掛けて塵をくろりて小
 罪とし免らば或ハ同名同生の二神と付て露程

の小罪まで此と記て見遁し給はるハ何とも不
 審み思ふべけれも先の喻は示すの如く世
 間の科人と拷問と罪の有丈と白状させ已
 罪の重をよせ他人と恨ど我罪を恨させて刑
 罰小處せしむハ仁政の御慈悲少くても現當
 罪を輕くかり給ふ御憐愍々々如し自業自
 得の惡人ハ佛の大悲も今の身と濟給ふあ能
 ほど是以佛菩薩大悲を以て五道の冥官と成て

其罪業を調べ己が作らざる罪科の重くを知せて
 少くも獄苦を軽く受らせ給はんのみ大悲方
 便なり左ふと時ハ己が罪を以て人と恨子がかく
 ハ此罪ハ作らざら妻がたかく、加程の悪ハ作るま
 ち〜〜己が心より起て作り〜罪ぢるあ〜と思
 ず〜罪ハ罪と重て重苦を受んまと哀給ひて
 五道の冥官と現ト其自業自得かるまと思ひ知
 せ〜苦〜輕受らせ又ハ遠生れ縁と結び或ハ

罪の未決ままを寄て中有と長〜〜めて其追
 福を待〜惡趣と轉じて善處よ赴せんとの御
 慈悲なり是故ハ釋尊ハ五百塵点劫の昔より
 往來娑婆八千返の化益を施〜今亦五濁惡世
 出現〜八万四千は教綱を張如何ふもして
 生死を離て快樂自在の身ハ〜種々よ
 教導在せども病縁ハ〜の者ハ是を信受せば
 是故ハ或ハ五道の冥官とかり或ハ八百万の神と

名乘弥陀の大悲が観音と形と現し給ひくハ三
十三身と變作し王位長者居士宰官婆羅門
婦女身童男童女魚鳥等とよめて身とやつて給ひ
て縁と結び濟度し給ふ普く勸有縁無縁の人等
淡く佛語と信じて因果應報の理と了知して後
世と願ひ根機相應の弥陀本願に念佛と信受し
決定往生の覺悟わさやふ上盡一形の念佛と昔
より王法國禁よ違背なく世間佛法共よ美く

生涯と送り速に順次の往生と遂給へし斯佛法
流布の世に生じ遇ぬら幸の中此幸なきや
若安穩小後世の營とせんする身にありあを
聞うど行せしめて空く旧の三途よ沈よ誠よ飯
器を扱うて餓死せよ異なりんりのとや幾く
思案ありん
是より已下十王經並地藏十輪經の意よ依て
初七日より三回思ふ至る迄十王の本地と明し

死に出る路



一五〇四 千手觀音卷六

冥途中有の足



一五〇四 千手觀音卷六

てゆくかゝの暗さなりけり前後左右も明なき一人
 として添ぎれば是非と訪人もあり其時の有様思ひ
 やり心細く悲しくと去れば一り娑婆も戀しく
 て妻子を慕へとも立歸るべし道なき路は弥々遠ざる
 往つても方も覺ゆる思分る道もあへ彼よはけ此よ
 つも只身ふそよりのこゝ悲しくの涙計也如此と何
 處を指ししやぐり程は路ゆく獄卒の迎と見ら人もあ
 り又七日は王の前を始て見ら人もあり是るか罪業

の浅淡小依てたり此外も又極善極惡中有あり
 有て極善の人直は極樂小生もあへ人天の
 善趣小生と極惡の者直は惡趣小墮在と此二
 は其の中有なり尋常ありて若し佛道修行よ
 志といつと其行と成るとるやどの惠解行業もた
 らて暮せる人よ皆中有あり今其人の相を明と
 りり偕し罪人冥々として足は任せ行程よ我
 のこ此道よ來りやうんと覺らふとて小目よ見へ

糸いとも罪人ざいじんの痛いたと叫聲さけぶこゑの時々耳みみは聞ゆきこ其時胸そのときしほ
 騒さわぎく怖おそろろ又獄卒ごくそは聲こゑとれりりと聞きへい
 如何いかせんと思おぼふ處ところは程ほどかゝ羅刹らせつの形かたちとらるらる今迄いままで
 僅わずかふ名なを聞き計はからふ親まご今これと見みる恐おそろろと荒あ
 角かく云い計はかり其後そのち跡あと先まづは付添つきま息いきとて繼つぎぎ責せか
 くまくま心こゝろふふ行ゆ程ほどふ死出しでの山やまを成なるる此こゝ
 山やま高たかくくままとと險けへへとと越行こへへへとも覺おぼへね
 と獄卒ごくそ共とも駈立かららと泣なり山路やまぢふふ岩い搦な

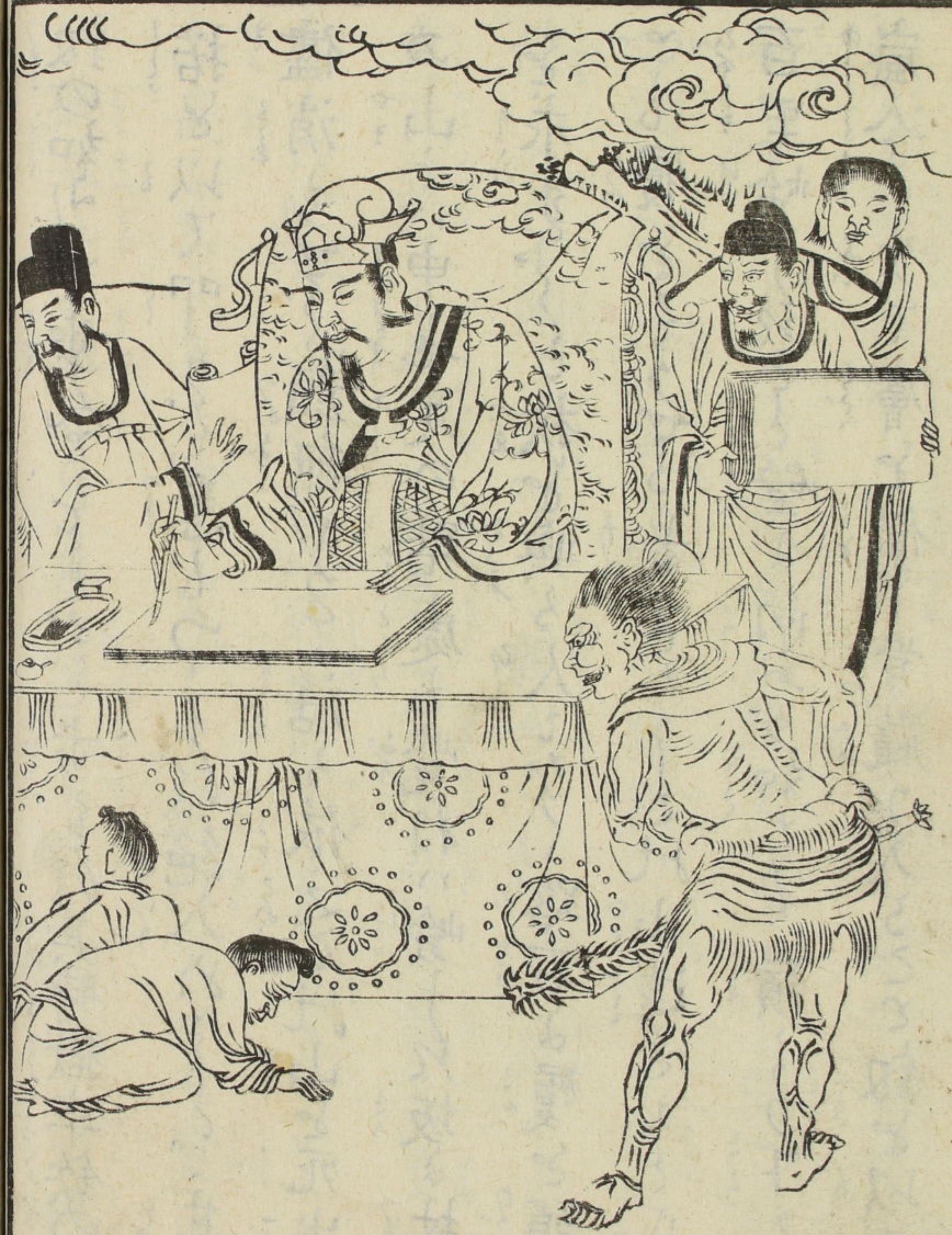
釵つばきの如ごとく歩あんとととと歩あむむ其時獄卒そのときごくそ鉄てつの
 拮しとと以もて叩たたきき息いきももつつるる絶と入とぬぬ其その
 儘まま消くもも顔かほ無なやや活いるる依よ之これれ山やまと死出しで
 の山やまの申まをす也なり足あしの踏處ふみところも覺おぼねね嶮けらら坂さかの杖つゑ
 と求もとむむ杖つゑと與あるる人ひともも路石みちいしの履くと願ねが
 とも履くとと者ものとと此山このやま遠とほくく八やち
 百里ひゃくり嶮けらら壁かべは向むかふふが如ごとく嶺たかねより下くだりり
 嵐あらし冷ひやくく吹ふて膚かわと徹と骨こ髓ずいふ入いること釵つばきと以もて



初七日
秦廣王

十五夜觀燈文會圖會日誌卷之十一

三二



十五夜觀燈文會圖會日誌卷之十一

三三

とすの如し如此種々の苦と受て泣く死出の山路
 と越過て始て秦廣王の御前みまへに至り見ると無量
 の罪人等色々小禁らして御前みまへに並び居たり
 其時大王罪人と御覽志ごらんし、宜く抑汝等おさへんら無始よ
 己來幾度この庭來りや其數恒沙ごんさも喩へ
 かび汝知とや地獄の業盡て娑婆しあはは還る度毎
 小鉄の拵こてと以て獄卒ごくそは三杖打せし人間にんげんは飯が
 速すみ小佛道修行せうぶつだうしゆぎやうして菩提ぼだい小趣せうしゆべし重おもて此惡趣このあくしゆよ

來りて勿なとと懃けんよ云い舎しやよ其驗そのけんもあく恣しよ
 罪業ざいごふを作つくて須臾しゆゐんの間のまよまま來き顔無かほなよ今
 娑婆世界しあはせかいの佛法ぶつぽふ盛さかふ弘ひろて諸宗しよしゆ同どうく其益そのやくと得
 る中なかも眞言しんごん上乘じやうじやうの法門ほふもんに父母ふぼ所生しよしやう身みと改あらため
 して速すみよ大覺だいかくの位ゐよ至いたるとつつり加か徑じやう目め出で
 度御法ごほふと聞きか何なにを修行しゆぎやうせどど徒ただ小飯せうはん
 來きるると其時そのとき罪人ざいじん申まをして云いく仰誠おほせまことよよ
 御事ごことは候うけへと此身このみより果報くわいほうつつてて

志く一文不通の賤と生り其上まゝ在家の
ことに候へば旁々以て左様なる修行の思ひ
ずして罷過候ひも唯拙と果報こそ恨め候
身の過いなりなく覺へ候ふと申せば其時大王大
怒て宜く嗚呼汝が理の六を更よ立まのれ其
故に在家れ身なるも眞言法に叶はんと云は一往を
の謂もあらんが何とて弥陀の本願在家の念佛
を簡してや六字の御名と称へんは何を智

恵の入つてや去りて弥陀超世の本願とつた三世諸
佛の利生は洩れ十方に淨土は入らねども必ず惡趣
隨とて罪業深重の衆生と慈と給ひて五劫
は思惟と竭えて案に立給へば本願をば善人惡
人在家出家持戒破戒有智無智の沙汰もかり
た名號と稱へん者と迎へんとの誓願をば此行
お於て何う行ふ難く何より叶ひ難く行せし
て空く過たりともや汝は欲癡の境は誑らぬて後

世と云ふこと忘果不當不善の心はひうりて修行せ
 りと覺るべし若尚子細わづら速に申開べし
 と睨給へ罪人理よ詰つて是非小咽で聲得よと大王
 重て宜く汝は今追憚所なり道理立と申しけり不
 何とて今の返事とい申さばと責給へ大王の仰肝
 小銘してた泣らり外の責とけり自ら我心と恨
 千度百度悔とも後悔先よ立りたり誠や此大
 王は本地不動明王大日如來の教令輪身して在る
 眞言宗の益と沙汰し給ふと理かり其故はゆづ眞
 言の彼尊の本宗カレ申さふ及ど次よ念佛宗
 於て親と謂はりまも其い云何と申さふ大日如
 來不動と現し不動秦廣王と成給ふ弥陀と大
 日の五智け中ふ妙觀察智と司り給ふ大日如來
 と說法利生よ趣給ふ時必と彌陀とかり給ふ
 立ちが彼宗の所談ふ故よ此王も本地誓約よ
 報へ此兩宗と勸給ふり覺たり但眞言の法よ

上土寶皇太子國會卷之上

於今當今の機根と云ふにたゞ五相三密の行者
 と云ふこと猶三業四威儀調難くして手少い印と
 結び口よ呪と誦し心は十方に散亂と去るに
 行者の三業同於本尊觀心せしむれば三摩地現
 前の憑あり如是ふく争り二種の悉地も成就せ然
 り法の本意は目出度うれども説の如く修せざるに
 其益と云ふ人もなり行に難きは法の失は非ど實に
 菩提心論は上智の人を爲す此法と説と云へるふ

近來の人々の下根の分も及りて争う如説修行
 して即身成佛の本意と違ふあり有人や去るに古
 徳の言も總じて聖道門の修行は末代惡世に至り
 て有教無人有名無實の法と嫌へるや然らば弥
 陀超世の本願は十方衆生と對機と云ふは善惡共
 嫌は猶大悲の本意と計は凡聖の中は殊は凡夫
 と本と善惡二機の中は凡聖と先は正しく
 爲凡夫兼爲聖人也と云へる即是也と云へる觀經の下々

品の説相と案どるふ若人有て五逆十惡と具犯
 諸の不善を具して一念慙愧の心もなして一生を
 暮せる者既命終んと欲するに地獄の猛火目を
 前より顯る獄卒符と撃て枕の元より責む心即ち顛
 倒と其時白と汗と流し手は虚空と把ら爰は善知
 識有て種々小慰く妙法と説又佛の功德と念せし
 教也雖然彼人苦に逼りて佛と念せふ違あは
 して次第に猶心を失ふ爰は善友重て云く然らば汝

もく弥陀の名號と稱し必と罪障消滅し給ふべ
 しと其時罪人如是至心と此教と信じて僅小南無
 阿弥陀佛と稱し聲の下より無量の重罪と
 消滅して正しく命終る時金蓮華の猶日輪の如し
 て其人の前より現る見方此時地獄の猛火變り
 清涼の風となり獄卒牛頭ハ跡と聞して消失ぬ
 罪人即ち正念をとり一念を頃の如して彼西方極
 樂世界に往生とて得と説給へり如是を利

益えきまゝ何なにの教きやうより有人あるまきま此この文ぶんも初はつい善ぜん知識ちしき
餘あま善ぜんとととし然しかもも其その益えきかかくくふ依よて後のちも稱しょう
名なと勸すすめめく往生おんじやうと遂つひくく此この經きやうの意いと窺うかがふ如ごと此この逆さか
罪つみの機きとと餘あま行ぎやう餘あま善ぜんの濟きみみ能あたりりど唯ただ念ねん佛ぶつの一いつ
法はふのと獨ひとりくく如ごと此この罪つみ人ひと迄いたりり助たすけをと云いままと頭あたま人ひとと
也なり往生おんじやう要い集じふふ極ごく重じゆう惡あく人ひと無な他た方はう便べん唯ただ稱しょう彌み陀た得とく
生じやう極ごく樂らくととくく即すなはち是これ也なり實じつふ超ちゆう世せ大だい願がんの思し議ぎ此この
文ぶんも明あきらかかるるめめのと也なり斯ごとくく大だい法はふと聞きくく乍しば猶なほ憑たもんんと思おもふ

心こころををちちくく曾さうて信しんずる心こころももりりくく徒ただも多おほの月つき日ひと送おく居い
て剩あま諸しよの罪つみ業ごふと作つくててありりととふふ又またりりや三さん途との故ゆゑ
里さとよ還かへて重じゆう苦くを受うまま更さらふ誰たれととの恨うらみや哀あはれれ皆みな人ひとを
此この理りと思おもひ取とりり偏ひと小せう本ほん願がんを信しん受じゆ一いつ專せん名な号ごうと稱しょう念ねん
して此この度たと生じやう死じの終はつりりて永えい快かい樂らくふ誇こほりり扱さく罪つみ人ひと
若し此この王わうの處ちよのく善ぜん惡あく輕けい重じゆういままま定さだままるるれれば二に日じつ
の王わうれ所ところよ遣つかははるると云いへり
淨じやう土と見けん聞もん集じふ存ぞん覺かく法はふ印いん作さく也なりふ云いふふ傳でん聞もんく閻えん魔ま王わう六りく鏡きやうと塵ちん
十一じふいち賢けん莫ま多た善ぜん圖と會かい卷くわん之し上じやう
三十一さんじふいち

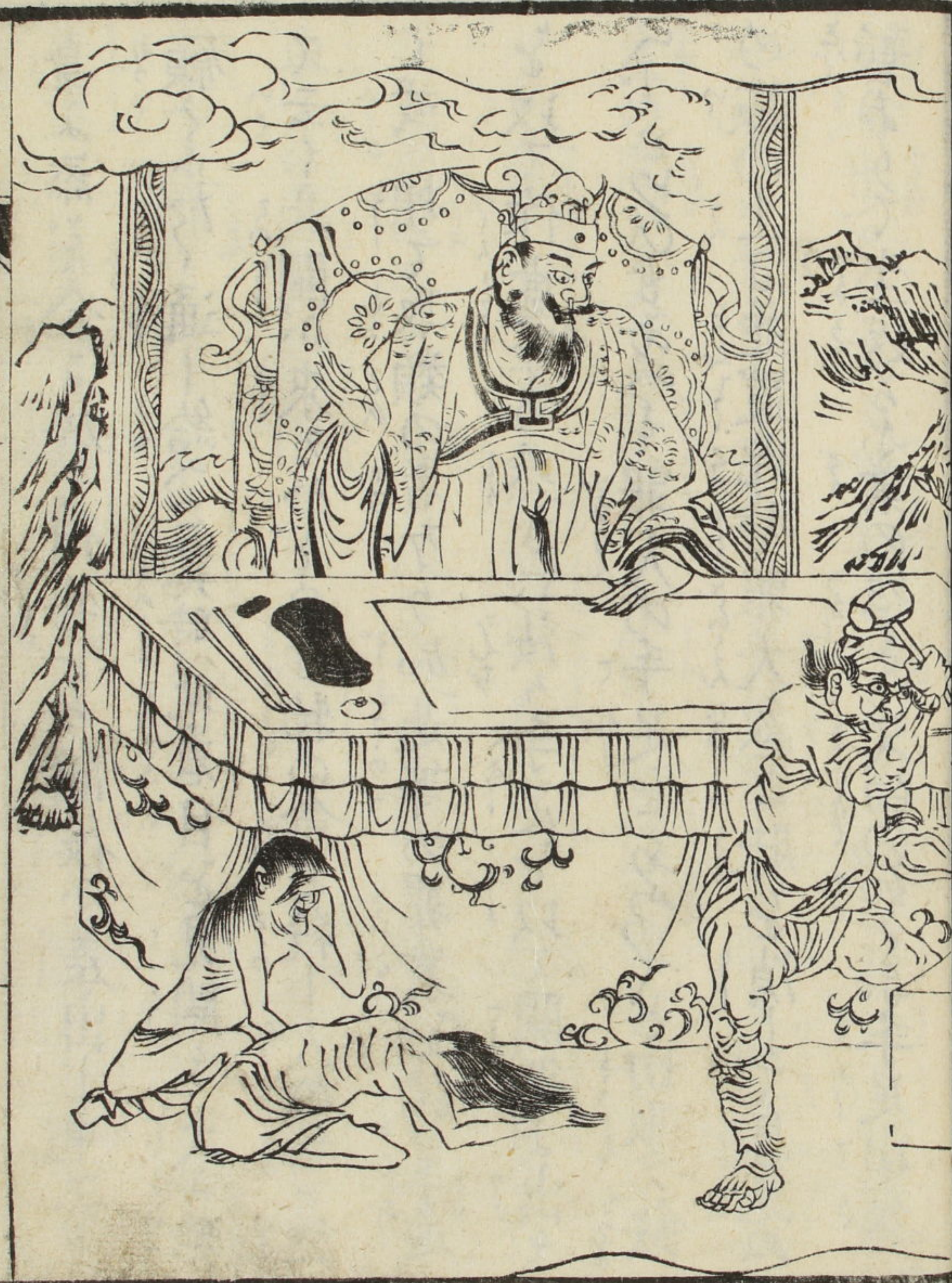
小罪は掛て知る俱生神の筆を露の輕罪も染て記す
然ふもつゝ惠刀やいづか何そ煩惱の網と切ん戒珠
瑕あり争り生死の闇と照ん爰よつゝ最後の息一
度たゑ人間の報己よほきて臨終小眼更よ閉冥途
小向んとする時三人の羅刹婆冥途より忽小來く
三魂と召秦廣王の廳よつて始て罪門關樹の本よ
在て悲の泪と中有の蒼よ流と憑とかけ親族の故
郷よ泣て我と知どあらうたたく罪業の前後小ま

つゝりて身としりしとびとら後さうそのハ悲の泪
喉よむせび先立ちりのいかなれ愁體小徧どさう
しつものら慕風あそ來つて關樹の葉とあそいふと
ふみしつゝほろばとありて身とつゝめくその葉こ
かゝるのぞくそのら死出の嶮山とく奈河を
幽岸ふつゝ等とつゝ六の書とす此十五經おび
地藏十輪經の意小依て中有れ相と示して後世と
大事とよべと上日と明佛法多門ありて八万四千を

十五賢聖の経を説く
三十二

しどもの何と根機相應とて巨益あべり去か
當今ハ末法これ五濁惡世あり機根最劣の凡夫
たへん身ハ已々が涯分と計根機相應の弘願他力と
憑專弥陀の名号と称念して西方ハ往生と遠べ
言と明されり然るに成ト難と難行と修せんより
行ドやきりして往やとてハ八宗の祖師龍樹の判
釋かぬ誰々是と信ぜり人ヤ無常迅速多努々
怠りみ勿

二七日初江王ハ本地ハ大聖釋迦牟尼如來とてありま
まるるの王の前ふまらぶ一の關あり此業の關
守の鬼あり其形喩と取り物チ一面ハ十二の眼あり
眼と動と時ハ光の出るふく電々如く口より炎と吹出
と罪人先此鬼見て忽々神と失ふ其時此鬼暫目
と閉て罪人と靜て云く汝知とや此處ハ關所あり
今ハ早く關役と爲へと其時罪人の云く娑婆候
一時の財寶ハ息絶眼閉時ハ悉く捨と候ひくと



二七日
初江王



身よ添そど今いま於おて何物なにかの關役かんやく小差出さしだし申ますべ
 願ねがひたら通と給たまへと其時そのとき此鬼目このまにと見開みひらき大おほ怒ど
 て云いく此關このかん小來こるかどの者物ものものの命いのちと殺ころし人の物ものと盜ぬす
 と或あるハ押おて取類との者ものたり如ごと是等このらの罪業ざいごうとは皆みな手足てあし
 と以もて作處つくところなり然しかもは汝なんぢら手足てあしと以もて關役かんやくよ出いで
 へとひもあへど罪人ざいじんの手足てあしとあつつくと切取きりて鉄
 の板いたの上うへに並置ならべ此時このとき罪人ざいじん忽たちに肝かんと消きして息絶いきぬ
 暫しばありて生返なまるる小業こごうの悲かなしみ又また白しろの如ごとくは手足てあし出い來きて

自みづから歩あむむとちち業風ごうふうよ吹ふく終つひは初江王しよえおうの御前ごまへ
 小こみそは付つふく終つひは初江王しよえおうの御前ごまへ問とて宣のたまはは汝なんぢ在
 生なまの間まいふる善根ぜんこんとは修しゆし如何功德いかにくつとくとはなり
 しを速すみふ申上まをべと其時そのとき罪人ざいじん娑婆しやばふ於おて如實ごとくよ作
 たる善根ぜんこんとも有あるは唯ただ口くちと閉しめと申上まをべと時ときは
 取とりての悲かなしみ數限かずかぎとは如何いかにとは責給せめ給たまへば若ごとしの
 更さらやと思おもはら廢忘はいぼう仕して覺申おぼさしと申まをせばその時そのとき大
 王おほ然しからは雙幢しやうどうの卷物まきものと召よせと仰あやせと此卷物このまきものと申まをす

此大王の左右は幢あり檀茶幢と名く右の幢と大
黒暗天女幢と名く左は在と神一切の小罪ゆづむ
すくび此と記給ふ此二神と總とく雙幢と名く彼
人頭より人間の支とらるふと掌れ中を見らる如し
罪人の一期を善惡と委記ゆへ此巻物と王より大
王より讀給へ罪人より承るふ我身の振舞比
恨めとた身と切裂らるるを思ひとらる其時大王
獄卒と召て宣く今此符と探るふ此者少善を種たる

事とせり又慙愧の心もせり早々衣と剥ぐなり宣へ
い彼庭ふ一の大樹あり衣領樹と名く上ふ一の鬼あり
懸衣翁と名く樹の下より一鬼あり此と脱衣
姫と名く此鬼罪人の衣を剥取て上らる鬼ふ渡せり
即ち受取て此と木を枝より取りて故ふ此鬼罪人
と睨て大王の仰せり速衣をぬぐべと罪人云々た
一重の衣せり定て往先十王の御前より參るべし争
裸めと耻と晒とせり願くは免給へと手と合とせり

その時彼鬼怒て云やう汝愚かり娑婆よ於て惡業
を作る時冥衆の照見とも耻と佛天を冥慮とも恐
と凡人の中よを心ある者此と指し笑し何とも
思ひ己が心よも善らぬと知れ罪も我心よと
耻ずして思の儘よ惡を作ると今ふ至て娑の醜と耻
と何の詮有ん今一衣と惜むもた今ふ猛
火の爲ふ焦とべ一早く脱ぐと責らむ力なく唯一衣
とぬきて三塗河の姫ふと哀なる哉も娑婆よ

在一時財寶と庫つと種々の衣服四季衣替花
やふ重祿著る家頼眷屬小冊と榮耀榮花暮
たる身と冥途中有の旅よ出く苦と受る身の習と
一衣と身と身よと家頼一人連も迷ゆ
悲しれ去る後一條院に崩御の後よ或人の夢よ見
て○故郷ふゆ人も告やらん知らぬ山路よひり
迷と詠し給ひ皇極天皇と申し帝冥途よ信
州の本多善佐ふ値給○ふ問人あふ暗

道泣々^{みちなみ}と^くゆくと^と谷^やと^と告^つを^を給^{たま}ひと^とや^や此^{こゝ}等^ら
 皆^{みな}一天^{いつてん}の君^{きみ}萬^{まん}乘^りれ^れ主^まと^と在^まり^また^た假^{かり}初^{はつ}の御^ご幸^{さち}
 少^{すこ}と百^{ひやく}官^{くわん}前^{ぜん}後^ごよ附^つ從^{じゆ}雜^ざ色^{しき}先^まと拂^{はら}ふと^と御^ご幸^{さち}在^ま
 一^{いつ}々^つ然^{ぜん}ふ^ふ黄^{わう}泉^{せん}の旅^{りょ}よ御^ご供^{くわん}一^{いつ}人^{にん}ち^ちろ^ろと^と實^{じつ}々^つ悲^{かな}く
 の限^{かぎ}ち^ちろ^ろる^る諸^{しよ}も^もけ^け墓^む無^なう^うけ^け兼^か合^あふ^ふ天^{てん}よ^よ在^あら^ら比^ひ
 翼^{よく}の鳥^{とり}地^ぢよ^よ住^すみ^み連^{れん}理^りを^を枝^え火^ひも^も水^{みづ}よ^よ諸^{しよ}共^こと^と淺^あく
 と契^{しぎ}も^も生^なと^と隔^へは^はる^る悲^{かな}く^くと^と重^{ぢゆう}苦^くよ^よ沈^{しん}む^むと^とハ
 夢^{ゆめ}も^も知^しら^らぬ^ぬ暮^くと^と人^{にん}鴛^う鴦^{やう}の^の衾^{きん}と^と重^{ぢゆう}も^も龜^き鶴^{かく}の

契^{しぎ}と^と致^ぢす^すも^も只^{ただ}露^{つゆ}を^を命^{いのち}の^のあ^あら^らと^と今^{いま}も^も我^{われ}思^{おも}ひ^ひ知^ち
 ら^らぬ^ぬ見^み聞^{きん}集^{しゆ}ふ^ふ云^いふ^ふ二^に七^{しち}日^{にち}の^のと^と初^{はつ}江^{かう}王^{おう}の^の廳^{てい}
 衣^い領^{りやう}樹^{じゆ}よ^よか^かく^く枝^えの^の低^ひ昇^{しやう}よ^よと^と身^みの^の皮^{かわ}と^と重^{ぢゆう}と
 苦^くく^くと^と忍^{にん}ぶ^ぶと^と身^みの^の皮^{かわ}と^と重^{ぢゆう}と
 諸^{しよ}慙^{ぜん}愧^きの^の衣^いと^と著^きる^る身^みの^の皮^{かわ}と^と刺^さと^と宣^{のたま}ひ^ひ娑^{しや}婆^ぱと^と
 罪^{つみ}と^と作^{つく}り^り時^{とき}自^{みづか}ら^ら其^{その}罪^{つみ}と^と知^して^て我^{われ}心^{こゝろ}よ^よ耻^はら^らぬ^ぬ他^たの

見聞と耻ら佛天の冥見と耻る心ありて後悔とて慙
 愧と云々の故慙愧と二字とい天小慙地と云々又自
 小慙他と慙とを釋したまへり又淡く悔る心より佛天よ
 も他人よと語出して誤り向來と慎嗜しと懺悔と云慙
 愧は心の中ふ耻慙るちり懺悔は口ふ出し姿は頭して悔る
 ちり共ふられ功德廣大なるべし佛常ふ懺悔等を勸
 給へり外典の上にも毛詩れ中は相鼠有皮人而無礼不死
 何為人而無義何不遄死と諷して鼠は能く死を厭ふ獸なり

皮の有と見よ生付よ身と莊ら耻を知威儀とほ
 くく小様よ見へる人として礼義と知ぬ者鼠よりい
 見苦しひ耻知とてと云意實ふ身れ耻は二重の薄帷
 子も隠せと心をも恥隠すとぬ佛天より御知
 ちりして御坐る○人ふみそめくもくもく身の科
 と知や佛の心とてと詠と如く耻る心れけりハ駒よ
 綱のちり如く此と放逸無慙と云故論よ慙愧ハ衣
 の如くと宣ひ今も文も慙愧の衣ちりハ身の皮と剥

と誠給へり 耻と知ぬ人前へ裸で出る如く也 殊更信受
本願の念佛行者ハ如來の眞見と耻恐く嗜てハ叶ぬ同
行會合の時ハ人前と思ふ懃ふ礼拜恭敬とせども一
人の時ハ麁末ぢる人が見ぬと嗜心をたゞけ人なごり
耻て佛もハ耻と佛天と盲ふと云者也 世間も憚御
眞見と恐て一人居ても其心中と氣がはらぐ御慈悲立
かゝり御耻うやと思知て稱名相續とせよと懃愧
の心あり眞實の佛法者といふべし亂心の者ハ晝中ふ

髪とよと裸で街市と狂廻ども自身よハ耻敷と思ひ
ぬ如く无懃无愧の愚人ハ无明の煩惱ハ狂ふ生
死の街市と懃愧ハ衣と著て狂四ら耻知どの我
身も己が自力ハ免てと角も懃と知べ
き身ハ非とれと善知識の介抱ハ依て本願醍醐の
薬と服し決定往生と願行を兼るゝ此法のカゝて自
ら懃も耻のし心中やと佛や菩薩神々五道の眞官
の聞かゝ見て御と冥の照覽を耻入心ハ起る是則

心鏡常は曇蔽の色耻を耻とも思ふべ我は良くて暮
とて浅猿々れ昔漢の揚震と云一人仁義の道
を守てその智慧と巧く時れ儒者も關西の孔
子と呼さるる人なりしが東萊郡の太守と成て行々
道よく昌邑の令王密と云人先は恩を受たる夏有て
夜中密は旅宿見舞礼と述る黄金十斤と捧られ
たとい揚震大に驚き天知神知我知子知と云て受
ら終るしとわは是と四知の清語と云て聞人太称

美やると善し惡と天地神明の見徹さる人か知
ぬと不当かこゝに爲へるや外典より勿自欺といひ
此は无理なりとも如斯とて利得ふなる斯ハ云ぬ苦
ちれ憎と憎と無理といひ虚言をほくつ心問
てとて耻うか人是とて心と欺と云ふ鎮主
府將軍源の頼光を御前とて保昌定光渡邊の綱か
と羅生門の鬼神在て人惱まると云ハ何共合点わり
と誰ハ實否と見届人と云時よ渡邊綱より馳往て

鬼神きしんふも討取うちとんと出い道みちあり思おもふ人ひと間ま
如何いか強勇きやうゆうよと後のち見みせしと思おもへどももいまだ
變化へんげの者ものふい出合いであど心こころえをを終は引返ひきかえ
て何なに更さらとと云いべさううど思おもひひとといいや
夫そのとと勇ゆうももたたく信しんととややとといいが心こころよ耻ち入いて一ひと首しゆよ
まれまれれと其歌そのうたよ○人ひとちちとと無なとといいやととありぬべ
心こころ問いはは何なにと答こたへんと口号くちがう羅生門らせいもんよ至いたる鬼おにの片かた
腕うでと切落きりおちと天下てんかふ名なを舉あげららしし後のちよ其更そのさらと他ほか

語ことららししととちちん實じつふ他人たにんよよ包かももちちととが我心わがこころの
問いひひ隠かくしてと隠かくふふと天地神明てんちしんめいと畏おそむとその心こころ
より身みもも亡なし家いへと滅めつとと小こ至いたる儒にうよ明徳めいとくと云い
他ほかのの所聞ところきざる所ところと恐おそむと慎しんめめと教しゆらら古こ
語ことよ人ひと間私語えんじんしご天聞てんきん如雷にうらい暗室あんしつ軒天視けんてんし如電にうでんとといいや
然しかららと何なにとも思おもふふ常じょう小我身せうがみと高たかかり人ひとと人ひとも
思おもふと无慚むざん无愧むけいよよとと口惜くちやくととああととやや淡たんく
心こころと志しののめめと此こを案あんととべべ

十五 續集 卷之五 圖會 卷之五 四十一

